

## NEWSLETTER

No.15

2006年5月25日

会長 小泉保 事務局 〒594-1198大阪府和泉市まなび野1-1桃山学院大学 林 宅男 研究室内

TEL 0725-54-3131 (代表) FAX 0725-54-3202

[ps.j-hayashi@kcc.zaq.ne.jp](mailto:ps.j-hayashi@kcc.zaq.ne.jp) (林 宅男 URL: <http://www.soc.nil.ac.jp/psj4>)

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

★ 会員の皆様、お変わりありませんか。日本語用論学会 Newsletter 第 15 号をお届けします。さる 3 月 21 日に、第 29 回運営委員会が開かれました。この号は、そこで討議された内容をもとに編集されています。

★ 会長挨拶 澤田治美 (関西外国語大学教授)

新緑の候、会員の皆様にはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。私は、このたび、小泉保先生の後をうけて、新しく会長を拝命いたしました。『ニューズレター』の紙面をお借りして、一言ご挨拶を申し上げます。

昨年 12 月に京都大学で開催された第 8 回大会は、数々の充実したワークショップ・研究発表や魅力的なシンポジウムに大勢の会員の皆様にご参加くださり、大会は成功裏に幕を閉じることができました。この大会では、多くの方々にご協力をいただきましたが、とりわけ会場を提供くださり、大会の成功のために数々のきめこまかなご配慮を賜りました山梨正明先生をはじめとする京都大学の関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

私たちの学会が誕生してから、今年で 9 年目を迎えます。1997 年の夏から、関西外国語大学の小泉保先生を中心として、準備会を数度開いて規約その他を整えました。翌年 5 月 16 日に第 1 回の運営委員会を開き、12 月 5 日に、第 1 回大会を関西外国語大学本館で開催いたしました。爾来、会員の皆様に支えられて順調に歩むことができ、とても有り難く思っております。また、こ

れまで小泉先生には長年にわたって、学会を支えていただき深く感謝申し上げます。来年は、学会発足 10 年目に当たり、記念大会が予定されております。「国際化」という視点に立って、海外から一流の語用論学者をお招きして、記念大会にふさわしい大会になるように準備が進められております。また、英文による「記念特集号」あるいは「記念論文集」を組む(編む)計画もなされております。さらには、会員どうしの中で、個別のテーマをめぐる「研究グループ」を作ろうという提案がなされています。こうしたイベントを実行したり、さらに充実した学会活動を推進するために、このたび(通常会員の)会費を値上げさせていただくことになりました。出費多端の折ではありますが、なにとぞ御理解賜りますようお願い申し上げます。

さて、「語用論はどこから来たのか」、「語用論はどこへ行くのか」、「語用論とは何か」といった問いかけは、今後も絶えずなされていくと思います。名著『言外の言語学』(小泉保著)に倣って言えば、「言外の意味の探求こそ、語用論の中心的課題である」ということになりましようが、「言外」とは、すなわち、「コンテクスト」であり、「コンテクスト」は、当該の発話・文(すなわち、テキスト)を取り巻く状況や場面、あるいは背景です。よって、語用論は直示、推意、前提、言語(発話)行為、認知、談話、ポライトネス、ジェンダー、社会制度など、多くの問題・課題と向き合うこととなります。語用論とは、ある意味で、「人生の学」ではないでしょうか。

私事で恐縮ですが、近年、少しずつ『万葉集』に親しむようになって、この感をいっそう強くしています。歌の「言外の意味」は、作者を取り巻く状況であり、歌われた場所であり、歴史的な事件であり、古語の意味であり、作者の本当の心であったりいたします。たとえば、次の歌は、私が最も感動する歌です(例は、『新 日本古典文学大系 1 万葉集一』(岩波書店)から)。

わが脊子を大和へ遣るとさ夜ふけて  
暁露に我が立ち濡れし (巻第二 105)

二人行けど行き過ぎがたき秋山を  
いかにか君がひとり越ゆらむ  
(巻第二 106)

詞書には、「大津皇子の窈かに伊勢神宮に下りて上り来たりし時に、大伯皇女の御作りたまひし歌二首」とあります。一見すると、ありきたりの相聞歌のような響きですが、ご存知のように、実は、ただならぬ事情を秘めた歌のようです。

大伯皇女と大津皇子とは同母姉弟です。大津皇子はなんのために伊勢に行ったのでしょうか。姉弟なのに、なぜ、二人は「窈かに」会わねばならなかったのでしょうか。なぜ、彼女は弟を「脊子」と呼んだのでしょうか。

朱鳥元年(686年)九月九日の父の天武天皇の崩御の後、大津皇子は十月二日に謀反の罪で逮捕され、翌三日処刑されています。皇子の伊勢行きは、事件直前の九月の下旬とされています。

「暁露」は、原文では、「鶏鳴露」と書かれていますが、「暁露」とは「暁に降りる露」のことで、「暁」は、夜半過ぎから夜明け近くのまだ暗い頃のことを指すようです(『日本国語大辞典第二版』)。伊藤博著『萬葉集釈注一』は、「伊勢の地の暗闇で相まみえるということが、二人にとって会話そのものであったように思える。長い夜の中の、沈黙という会話によって、すべてを交流し理解しあって二人は別れ去ったのではなかったか」(p.245)と述べています。

稲岡耕二著『万葉集』には、「遣る」に

は皇女の複雑な思いがこめられている。ヤルは、元来自分の力の及ばない遠くへ行かせる意味の語であり、引き留めたい気持ちはもちろん、手放す不安まで感じさせる語である」(p.120)とあります。そうすると、彼女の不安は的中したことになります。

万葉集を読むたびに、自分はいかに古代日本語や古代史に無知であるかを思い知らされますが、万葉集研究者の正確な考証やすぐれた注釈のおかげで、万葉集に潜む「言外の意味」をたどれることは、私にとって大きな喜びです。

末尾ながら、会員の皆様が健康に恵まれ、ご研究の成果がますます上がりますようにお祈り申し上げて、ご挨拶とさせていただきます。

## 《事務局より》

### ★ 第8回大会総括

1. 参加者 186名  
現会員 120名  
新入会員 18名  
当日会員 40名
2. 懇親会参加者 57名  
(内、4名は招待)
3. 第8回大会運営費(支出)内訳  
人件費 105,000  
事務局費 327,307  
講師謝金 60,000  
講師交通費 50,000  
懇親会費 148,905

### ★ 2005(平成17)年度の会計報告

本学会の会計年度の締めは3月末日となっていますが、昨年度の決算報告は以下の通りです。会員の皆様には今年12月の大会時にお諮りし、ご承認をいただく予定です(会計監査委員からは、すでに監査を受けております)。

#### (1) 2005(平成17)年度決算報告

収入 前年度繰越残高 2,987,763

会費 (382 口)	1,528,000
学会当日会員会費	92,000
予稿集売り上げ	186,000
『語用論研究』等バックナンバー売 り上げ	24,000
懇親会費	232,000
学会補助	87,000
普通預金利子	104
合計	5,136,867

<u>支出</u>	印刷費 予稿集	135,765
	『語用論研究』第 7 号	481,630
	プログラム	52,645
	郵送費	106,646
	事務局諸費 (会議費、学会当日諸費 用 (雑費、消耗品など))	405,199
	人件費 (学生アルバイト)	231,600
	旅費交通費	50,000
	講師謝金	80,000
	懇親会費	208,905
	合計	1,752,390

次年度繰越金 (普通預金残高)  
3,384,477

## (2) 2006(平成 18)年度予算

(大会が 12 月のため、毎年その年度の予算を大会時に決めております。以下は第 8 回大会で承認されたものです。)

### 収入

会費 (4,000 円×300 名)	1,200,000
学会当日会員会費	30,000
予稿集売り上げ	180,000
『語用論研究』等バックナンバー売 り上げ	20,000
合計	1,430,000

### 支出

印刷費	650,000
(内訳) 予稿集	(180,000)
『語用論研究』	(400,000)
プログラム	(70,000)
郵送費	150,000

事務局諸費	70,000
大会当日経費 (文房具、講師料、 アルバイト代、会場費、雑費、懇親 会費補助など)	500,000
旅費交通費	60,000
合計	1,430,000

以上

### ★ 次回大会発表募集

今年度の第 9 回大会は、2006 年 12 月 9 日 (土) に、桃山学院大学 (〒594-1198 大阪府和泉市まなび野 1-1 桃山学院大学 TEL 0725-54-3131 (代表)

FAX 0725-54-3202) で開催される予定です。今回は、従来からの「研究発表」、「ワークショップ発表」に加え、新たに、「ポスター発表」を設けました。奮って大会での発表にご応募下さい。

### ★ 大会「研究発表」、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」の応募要項

第 9 回大会での「研究発表」、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」の発表の応募要項は以下の通りです。

#### <応募要項>

1. 発表応募者は会員に限ります。応募者が会員でない場合、必ず応募と同時に [入会の手続き](http://wwwsoc.nii.ac.jp/psj4/) をしてください (入会方法は、<http://wwwsoc.nii.ac.jp/psj4/> を参照)。

2. 選考及び研究発表の割り振りは運営委員会が行い、結果は応募 1 ヶ月以内に応募者に通知します。

#### 3 発表時間：

ア. 「研究発表」：25 分以内 (別に質疑応答 10 分)

イ. 「ワークショップ発表」：(一論文につき) 15 分以内 (別に質疑応答 5 分)

ウ. 「ポスター発表」：2 時間程度 (発表者は掲示物の前で待機)

4. 応募原稿の「発表要旨」のページ数（参考文献は文字数に含めません）：

ア. 「研究発表」：3 ページ以内（1 ページは 25 文字 x 30 行とする）

イ. 「ワークショップ発表」：（一論文につき）1 ページ以内（1 ページは 25 文字 x 30 行とする）

ウ. 「ポスター発表」：1 ページ以内（1 ページは 25 文字 x 30 行とする）

5. 応募の締め切り：2006 年 8 月 31 日。

6. 応募方法：出来るだけ電子メールでお願いします。どうしてもそれが無理な場合には郵便等でお届けください（電子メールで提出する場合は、郵便等での別送は不要です）。締め切り期限内に電子メールで受理した原稿につきましては、事務局から受理確認のお知らせをお送りします。

《電子メールの場合》

ア) 件名を「研究発表応募」、「ワークショップ発表」または、「ポスター発表」のいずれかとしてください。

イ) 応募原稿は、Microsoft Word で作成し、添付ファイルで事務局アドレスまでお送りください。その際、ファイルは 1) 「個人情報ファイル」と、2) 「発表要旨ファイル」の二つに分けて作成する。

ウ) 二つのファイル名を、それぞれ、個人情報(X).doc、発表要旨(X).doc（X には応募者（代表）の名字をいれる。例：個人情報（林）.doc、発表要旨（林）.doc）とし、一つの応募メールにこの二つのファイルを添付して送ってください。

エ) メール本文には、添付ファイル 1) 「個人情報ファイル」の内容と同じ個人情報を貼り付けて送ってください。

1) の「個人情報ファイル」には、冒頭に「研究発表」、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」の何れかであることを明記し、その後、題目、氏名（必ずふりがなをつける）、所属・職名、住所、電話番号・ファックス番号、電子メールアドレスの順に書いてください。ワークショップでの発表は個人の他、グループでの応募も可能です。グループでの応募の際は、一論文ごとの個人情報の他、グループ全体のテーマとグループの代表者を明記したものを、一つのファイルに入れて送ってください。

件名：（「研究発表」、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」の何れか）

題目：XXXX

氏名：XX XXXX（ふりがな）

所属・職名：XX 大学 XX 学部 XX

住所：〒xxx-xxxx XXXX.

電話番号：xxx-xxx-xxxx

電子メールアドレス：xxxxxx@xxxx

2) の「発表要旨のファイル」には、冒頭に「研究発表」、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」の何れかであることを明記し、題目の後、要旨を書いてください。グループでのワークショップ発表への応募の際は、一論文ごとの題名、発表要旨の他、グループ全体のテーマを明記し、一つのファイルにまとめて下さい。

（「研究発表」、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」の何れかであることを明記する）

題目：「XXXX」

（例）本発表では・・・・・・・・

・・・・・・・・

## 《通常郵便の場合》

電子メールでの応募の場合と同じ要領で原稿を作成してください。個人情報については、A4の用紙を用いて、題目、氏名(必ずふりがなをつける)、所属・職名、住所、電話番号・ファックス番号、電子メールアドレスを明記したものを2部(コピーで可)添付してください。発表要旨は、別紙に、A4の用紙を用いて、冒頭に「研究発表」、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」の何れかであることを明記し、1行開けて、発表題目を明記し、更に2行開けて発表要旨を書き、その原稿を2部(コピーで可)提出してください(名前等は発表要旨には書かないで下さい)。

## 6. 提出先

《電子メールの場合》:

[psj-hayashi@kcc.zaq.ne.jp](mailto:psj-hayashi@kcc.zaq.ne.jp)

《通常郵便の場合》:

〒594-1198 大阪府和泉市まなび野 1-1 桃山学院大学 林 宅男 研究室 日本語用論学会事務局 TEL 0725-54-3131 FAX 0725-54-3202

(必ず、封筒の表に、発表形態に応じて、「研究発表応募」、「ワークショップ発表応募」或いは、「ポスター発表応募」と朱書きしてください。)

## ★次回大会講演について

次回大会では、シンポジウムに代わって、講演を企画しています。講師には、今年度から新たに本学会の会長に就任されました、澤田治美氏(関西外国語大学 教授)、及び、Hartmut Haberland 氏 (Associate professor, Department of Language and Culture, Roskilde University, Denmark、Journal of Pragmatics の編集委員)を予定しています。

## ★『語用論研究』第8号投稿募集

学会誌『語用論研究』第8号への投稿を募集しています。投稿規定は『語用論研究』第7号と学会のホームページに記載されて

いるとおりです。多数のご応募をお待ちしています。以下の要領でご応募下さい。締め切りは2006年8月31日(木)です(研究発表応募と同じ)。

## &lt;&lt;投稿規定&gt;&gt;

1. 投稿は会員に限るものとする。(会員でない場合は、応募と同時に入会手続きをとること)。

2. 投稿論文は未公開の論文であること。ただし、すでに口頭で発表したものなどに相応の修正・加筆を加えたものは、審査の対象になる。同じ年度の日本語用論学会大会で発表が予定されているものは、発表前の投稿を認めない。また、応募の際は、本人と分かる書き方はできるだけ避ける。

3. 使用言語は原則として日本語または英語とする。

4. 投稿は1年中受け付けるが、当該年度の最終投稿締め切りは、毎年8月20日、採否決定を10月末日、刊行を12月とする。

5. 採否は締め切り後1ヶ月以内をめどに決定する。

6. 枚数、書式など。

a. 原稿枚数:A4、横書き、15枚以内(注、参照文献を含む)。

b. 書式:1ページ、日本語の場合は32行38文字とする。英語の場合は1ページ、1行70ストローク、1ページ32行とし、フォントの大きさを小さくして大量のストローク数になることは避ける。注や、参照文献の活字を小さくしない。ただし、図表の挿入は可能。

c. 原稿の1ページ目はタイトルのあと1行アケで氏名、そのあと2行アケでアブストラクト(英語で、1行70ストローク、8行以内)、さらに2行アケでキーワード、そのあと2行アケで本文を続ける。ただし、採否決定前の投稿論文その

ものには氏名を書かない(掲載決定後に編集委員会より指示する)。

d. 例文と本文の間は1行アケル。

e. 各節の前は1行アケル。

f. 注は、1, 2, 3のように、括弧を用いない数字だけとする。

g. 見出しのサブセクション番号は、1.1.のように、数字の後にピリオドを置く。

h. セクションの「はじめに」または「序論」は、1.ではじめる。

7. 注は参考文献の前にまとめて付ける。

8. 参考文献(参考文献、引用文献という言い方はしない)の書式は以下の例にならう。

Grice, H.P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Hopper, P.J. 1979. "Aspect and Foregrounding in Discourse." In T. Givón ed. *Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*, 213-241. New York: Academic Press.

Horn, L. R. 1985. "Metalinguistic Negation and Pragmatic Ambiguity." *Language* 61:1, 121-174.

小泉 保. 1990. 『言外の言語学—日本語用論—』東京:三省堂.

野崎 昭弘. 1995. 「言葉と言葉の間」『月刊言語』、24:2 (2月号) 62-69. 東京:大修館.

9. 参考文献に関する注意事項

a. 参考文献は本文中で引用したもののみとする。

b. 英語の文献、日本語の文献を混在させて、アルファベット順に並べること(別々に分けない)。

c. 共著者の場合、英文は & を使わず

and、日本文は・(なかぐろ)とする。

d. 雑誌については日本語、英語とも、巻数、号数、ページ数を明記する。

e. 英語の文献名で、語頭については、内容語は大文字、機能語は小文字とする。第1語の語頭のみ大文字で、あとは小文字という形式はとらない(上記8の英語の参考文献の書式参照)。

f. 採否決定前の投稿論文に投稿者本人の著作を多数挙げて、本人と分かるような書き方をしない。

10. 提出部数:原稿は6部提出する(コピーで可)。

11. 抜き刷りは20部を無料で贈呈する。それ以上の部数を希望する場合は学会事務局へ連絡すること(費用は執筆者の負担とする)。

12. 執筆者構成は初校のみとする。校正の際の内容にかかわる原稿への加除は認めない。

13. 氏名(ふりがな)、郵便番号、住所、所属、職名、連絡先電話番号、FAX番号、e-mailアドレスを別紙に記入し、そのファイルが入ったフロッピーディスクとともに提出する。

14. 送付先:〒606-8501

京都市左京区吉田二本松町  
京都大学 大学院人間・環境学研究科

言語科学講座

山梨正明 研究室

TEL (075)753-6639/7893

Fax (075)753-6722

(「投稿論文在中」と封筒の表に朱書きのこと)

15. 掲載決定後に、最終原稿の入ったフロッピーディスクと完成原稿を提出する(採否決定前の投稿の段階では提出しなく

てよい)。提出原稿、フロッピーディスクは原則として返却しない（送付先等詳細は、掲載決定者に別途通知する）。

### ★ プロシーディングズの編集報告

日本語用論学会大会研究発表論文集（プロシーディングズ）の発行は今回初めてですが、ほとんどの発表者が投稿して下さっています。編集作業はこれからですが、会員の皆さんにご満足頂けるように、魅力的な論集作りを目指しています。なお、来年から英文の要旨とキーワードを付けて国際的にも PR したいと考えています。大会研究発表論文集の発行によって、今後会員が増えるものと思います。（プロシーディングズ編集担当： 余 維）

### ★ 『第3回談話会』について

この度、第3回「談話会」を下記の要領で開催することになりました。この談話会は、1-2名の講師をお招きして最近のご研究について講演をしていただき、その後、ディスカッションを通して、それぞれの分野の理解を深めることを目的としておこなうものです。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

#### 記

講師： 児玉徳美

司会： 高原 脩

日時： 7月1日（土） 15:00～17:30

（受付 14:30～）

会場： 龍谷大学 大宮キャンパス 清和館3階ホール

（JR「京都」駅から徒歩約10分、市バス約3分）

〒600-8268 京都市下京区七条通大宮東入大工町125番地の1

Tel: 075-343-3311(代表)

（龍谷大学大宮キャンパスへの交通アクセスおよび大宮学舎のキャンパスマップは<http://www.ryukoku.ac.jp/web/map/omiya.html> をご覧ください。注意：会場は深草キャンパスではありませんのでお間違えのないようお願いいたします。）

演題：「言語学は分析対象をいかに拡大できるか：閉塞状況からの脱出に向けて」

概要：20世紀は Saussure と Chomsky による二度の言語革命を経たが、言語構造を抽象化する過程で結果的には分析対象を縮小していった。20世紀末に生まれた語彙意味論や構文文法もこの潮流の中にある。しかし単に文を積み重ねたものがテキスト全体の意図や主張につながるわけではない。特に意味の面で全体は部分の総和ではない。

閉塞状況から脱出するためには、第1に意味上文から談話・文章・言説にまで対象を拡大し、第2に人が生得的にもつ能力と生後の社会経験に由来する知識を区別し両者が言語表現にどのようにかかわるかを明らかにする必要がある。

意味上、個人的・社会的な主張や価値観などを含む言説（の秩序）という概念を導入することにより言語表現を形成する多様な因子の統合をはかる。そのことによりはじめて言語活動の全体像に迫り、言語と文化や他の人文社会科学との共通基盤を探ることができる。

講師プロフィール：1935年生まれ。広島県出身。立命館大学名誉教授。

著書：『依存文法の研究』1987 研究社、『語順の普遍性』1987 山口書店、『言語のしくみ--意味と形の統合--』1991 大修館書店、『ことばと人間と社会と』（共編著）1996 京都修学社、『スーパー・アンカー英和辞典』（共編）1997 学習研究社、『言語理論と言語論--ことばに埋め込まれているもの--』1998 くろしお出版、『意味論の対象と方法』2002 くろしお出版、『意味分析の新展開--ことばのひろがりに応える--』2004 開拓社、『ヒト・ことば・社会』2006 秋刊行予定、など。

お問い合わせ先：日本語用論学会事務局  
psj-hayashi@kcc.zaq.ne.jp（林宅男）

〒594-1198 大阪府和泉市まなび野1-1  
桃山学院大学 林宅男 研究室内

TEL 0725-54-3131（代表）

FAX 0725-54-3202

**★研究会グループの発足のご案内**

このたび、本学会では、学会のより一層の活性化と語用論研究の発展、及び、語用論研究者の相互交流を図るべく、語用論の下位分野および関連分野における研究会グループ(SIG)の発足を呼びかけることになりました。この研究会では、個別の研究テーマを設定し、それぞれの内容と、事情に合わせて、読書会、研究発表、共同研究などの活動を行うものです。

研究会の規約等の詳細は検討中ですが、その活動を奨励、推進させる目的で、語用論学会からは研究会活動費として、若干の補助を予定しております。研究会の内容は、語用論に関係するものであれば、どのようなものでも構いませんが、出来るだけ、その目的がはっきりしたものを歓迎します(例：関連性理論、ポライトネス、モダリティ、歴史的語用論、ダイクシス、テキスト語用論、ナラティブ、会話分析(CA)、批判的談話分析(CDA)、認知語用論、第2言語習得語用論、談話文法、談話管理研究)。また、メンバーの構成も本学会の会員が主たる構成員であれば、非会員の参加も認めます。研究会の発足をご希望の方は、[hayashir@konan-wu.ac.jp](mailto:hayashir@konan-wu.ac.jp) (日本語用論学会事業委員会 林礼子)宛、件名を<研究会グループの発足の申し込み>として、本文に、研究会グループ名、研究題目と簡単な内容、及び、(代表者を明記した)メンバーのお名前を書いて、お送りください。

(事業委員会)

**★学会出版ニュース**

小泉保著『言外の言語学—日本語語用論』の中国語版翻訳出版される  
中国語書名：『言外的語言学—日語語用学』  
余維・陳訪澤他翻訳、A5判 387頁、商務印書館(北京)21元(RMB)。  
(日本での入手先：丸善・東方書店など)

<翻訳者のことば>

この度、筆者が陳訪澤(広東外語外貿大学教授)他との共同翻訳により、小泉保先生(日本言語学会顧問・日本語用論学会前会

長)のご著書を中国語に翻訳し、中国学術専門出版社—商務印書館から出版されることになりました。そもそも本書の翻訳は、6年前に筆者が中国の語用論全国大会で研究発表をした際に、本書を紹介したところ、研究者の間に関心を集めたことがきっかけとなって実現したものです。これまでこの分野では、欧米理論の紹介が主流でしたが、日本からの理論・応用研究の発信は初めてのことでした。中国語用論学会会長の何自然先生からぜひ本書を翻訳して、中国の読者にも紹介してはと強く薦められました。その後、翻訳に着手してから、出版に至るまで4年かかりました。本書は、意味論、直示、推意、前提、発話行為など多くの章から構成され、各論ごとにエピソードが入っているために、訳すのに苦労しました。

本書は、語用論理論を日本語と他言語の対照分析に応用した初めての研究書で、すでに日中の多くの大学では語用論研究の指定図書ともされています。この度、中国語版翻訳出版するにあたって、さらに巻末に語用論日中学術用語対照一覧表を付け、よりバージョンアップしました。本書が語用論を始め日中対照言語学の研究に貢献できれば、幸いです。

(事業委員：余 維)

**★学会費の改訂のお知らせとお振込みのお願い。**

本学会は、9年前に発足以来、学会費を4,000円のまま据え置きしてまいりましたが、今後、プロシーディングや名簿の発行、第10回記念大会開催、研究会の立ち上げ等、一層の活動の活性化、そしてサービス向上を図るため、本年度から学会費を改定することを、今年3月21日開催の第29回運営委員会におきまして決定いたしました。改訂後は、一般会員：5,000円、学生会員：4,000円、団体会員：6,000円、となります。どうか、会員の皆様には、改訂の趣旨をご理解いただき、ご了承いただければ幸いです。

つきましては、このニューズレターとともに2006年度会費の振替用紙が同封されています。この用紙でお早めに振り込み下

さいますようお願いいたします。

尚、振替用紙が、2枚入っている方は昨年度分の会費が未納の方ですので、学会の会計をご理解の上併せてお払い下さい（尚、昨年度の会費は、全会員 4,000 円となります）。2年連続して会費を未納されますと、会員の資格を失効します。なお、住所・所属に変更や移動のある方は、事務局にメールあるいは郵送でご連絡ください。振り込み用紙の通信欄に書くのはなるべくお控えください（文字がかすれて読めないことがあります）。なお、行き違いがある場合はご容赦下さるようお願いいたします。

★ 個人情報の取り扱いに関する御連絡のお願い

本学会では、この度、学会の更なる発展と会員相互の連絡交流の促進を計ることを念頭に、会員名簿を作成することになりました。名簿の発行に付きましては、近年、特に個人情報保護の観点から、様々な問題が指摘されていることは御承知の通りです。そこで、本学会でも、これらの情報につきましては、その適正な取扱いの確保と個人の権利や利益の侵害の防止を図る為、その公表には慎重な取り扱いをさせていただく所存であります。つきましては、既に会員の方で、まだお届けでない方、お届けを変更される方、及び新しく本学会に入会希望される方は、（1. 氏名 2. 住所 3. 所属（身分＜教員、学生、非常勤等＞） 4. 電話番号 5. ファックス番号 6. メールアドレスのうち）項目別に、会員名簿上に掲載を不可とするものにつき（また代替の情報がある場合はその内容を）事務局名簿担当者(yamamoto@ipcku.kansai-u.ac.jp 山本英一)宛、メールでご連絡いただきますようお願いいたします。

★ Forum

「目に青葉山ほととぎすはつ松魚（かつお）」  
久保 進

この句は、江戸時代中期元禄の俳人、山口素堂の作であります。素堂は、松尾芭蕉の朋友あるいは師とまで称せられた人で、

芭蕉のために黒子に徹した逸材でありました。素堂研究者の清水三郎氏は「芭蕉の俳諧集の中には素堂の編集意見や素堂と模索した新風論もあり、二人で奏でた数々の試みは絶妙の二人三脚と賞賛する文学者も居られる」と述べられています<sup>i</sup>。素堂は、「目に青葉」ではじまるこの五七五の17文字の中に、江戸時代の初夏の世界を視覚、聴覚、味覚という三つの感覚による私的受容を通して実にリアルに描写することに成功しています。素堂本人が彼の網膜や聴感覚や舌で経験したこの対象世界は、言うまでもなく時と共に刻々と変化する動的実在であり、一定の時間幅をもった経験世界であります。そして、この句には、それに対する「賞味」とでもいうべき値が結実しています。その値は、目に映る新緑の鮮やかさであり、里山に伴侶を求めて飛び交う雄のホトトギスの躍動感とリズムカルな鳴き声の切れの良さであり、そして、脂の乗った初鯉のおいしさであります。それらは、「初夏はこれではなくては」という素堂の経験世界に対する肯定的評価を代弁してくれるものたちであります。このような素堂の価値付けは、時を超えて私たち現代人にも生き生きとそのままと伝わってきます。なぜならば、この句を目にする私たちの誰もが、素堂の評価に共感でき、この評価を媒介として各自のこれまでの経験に応じて、彩り豊かな各自の初夏の世界を心に描き出すことができるからです。

この句は、青葉、ホトトギス、初鯉をそれぞれ初夏の代名詞として捉えています。これらは俳句の季語に相当する‘季の詞’と呼ばれるものです<sup>ii</sup>。俳諧とは異なりますが、俳句の世界では水原秋櫻子先生が「禁忌8条」の中に纏めておられるように、季語を3つも並べることは特別な場合を除いて避けるべきことです。素堂はこの俳諧においては、異なる感覚に繋がるそれぞれの‘季の詞’に敢えて別々の世界を担わせており、極めて巧みな技巧を用いていると言わざるをえません。また、素堂は自身の直接経験を「目」、「青葉」、「山ほととぎす」、「初松魚」といった極めて素朴な身近なコトバで描写しているという点も忘れてはな

りません。少し、味気なくなりますが、この句を私の言語行為論に翻訳しますと、「作者が、視覚、聴覚、味覚の3つの感覚によって、初夏という外界の多面世界を抽出し、それらを、心の空間に、初夏の代名詞という点で相互に関わりを持つ3つの別個の命題として映し出し、心で吟味した上で、その結果としての評価的心的状態の有様を、コトバという慣習(convention)と俳諧という慣習的技法を用いて表現した所産」となります<sup>iii</sup>。ところで、この俳諧を耳にした当時の庶民は、どのように受け止めたのでしょうか。いくら当時の江戸庶民が初物を好んだとは言え、青葉とホトトギスは別にしても、初鰯はともに入らなかつたはずで、というのも、当時、初鰯は1匹、三分(三両という説もある)もしたからです。現代の価値に直しますと約4万円です。「女房を質に入れても食べたい初鰯」という気持ちの一般の庶民は、素堂に対して「初鰯を食べられていいな」と羨望の目で眺めたに違いありません<sup>iv</sup>。素堂は自身と外界との関わりに遊び、その気持ちを素直に表現した(発語内効果)に違いありませんが、このような意図せぬ発語媒介効果を庶民に与えたかも知れないのです。しかし、解釈は、受け手の自由ですし、その自由度は慣習による束縛度に反比例します。特に、俳諧はコトバによる遊びと諧謔を楽しむものです。初夏の訪れに対する賞賛の気持ちを効果的に描写するために用いられた‘季の詞’などの持つ慣習やそれが使用される決まりに拘泥しない庶民は、大なる自由度をもって自在に解釈したことであります。一般に、俳諧であれ日常会話であれ、言語による行為はその産出と解釈の双方において、基本的に参加者の裁量に委ねられています。換言すれば、言語行為は、コトバと言う慣習の縛りと適度に折り合いをつけての行為といえるでしょう。

注

i 詳しくは、清水三郎氏のホームページ(©1999-2005)「素堂講座3 府中 山口屋市右衛門 考察」を参照されたい。(homepage3.nifty.com/hakushu/sodou-ko

uza03.htm)

ii 『国語大辞典』によると「季語」は明治41年に大須賀乙字が初めて用いたそうです。

iii 技術的には、「心から世界への合致を介して、言葉から世界への合致のタイプの創作的言語行為」ということになります。

iv 清水氏によると、素堂は資力があり「芭蕉庵に隣接するか、包含する場所で四百四十坪の敷地で幕府郡代伊那半十郎の屋敷跡地」に住んでいたようですから、初鰯を食べる資力は十分にあったと考えられます。

### ★編集後記

今回は、はからずも和歌や俳諧に関わる記事が二つ掲載されました。和歌や短歌、俳諧や俳句、そして、小泉保先生が『語用論研究(創刊号)』や『入門 語用論研究』(研究社)の中でお取り扱いの川柳といった、短詩型文学の作品は、五七五(17文字)あるいは五七五七七(31文字)といった限られた字数の中で、季語や縁語、枕詞といった表現や係り結びなどの慣習を駆使して、作者の内的あるいは外的世界を描き出し、読者にあたかも読者自身が作者と同じ経験をしているかのごとき機会を提供してくれます。これらは、文学研究者のみならず私たち語用論を研究する者にとっても極めて心惹かれる領域でありましょう。日本語が描き出す世界でもあることを併せて考えますと、人とコトバ、そして描写対象である世界の三者関係を語用論の様々なアプローチから会員の皆さんにも研究していただきたいと願っています。併せて、この領域を対象とする研究グループの登場も期待しております。

今号より新企画として「学会出版ニュース」欄を設けました。会員の皆さんによるご自身の語用論関係の書籍の紹介記事を募集します。体裁は、上記欄を参考にして下さい。振るつての投稿を下記のアドレスまでお送り下さい。お待ちしております。

[psinewsletter2006@yahoo.co.jp](mailto:psinewsletter2006@yahoo.co.jp)

(広報委員長 久保進 記)